

学習指導要領にみる陸上運動の変遷と今後の課題

Changes in learning instruction for track and field by course of study and future topics

池田 延行

Nobuyuki IKEDA

I. 研究の目的

教育の今日的な課題や学校を取り囲む様々なテーマを解決すべく、学習指導要領はおおよそ10年に一度のサイクルで改訂がなされる。現行学習指導要領も、平成20年3月に告示され、すでに6年近く経過している。我々は、現行学習指導要領の趣旨を生かすべく、小学校の陸上運動に焦点を当てて今まで幾つかの研究論文の作成や学会発表を行ってきた。

それらは、「平成25年度体育研究所報告書」に整理して記載している。それらに記載された内容は、陸上運動授業における発達段階による学習の適時性の把握や客観的な評価基準の作成、「投げる運動」などの新たな種目の提案を通しての陸上運動授業への体系化への提言などである。

こうした我々の今までの研究を踏まえて平成26年度の研究では、戦後の学習指導要領変遷における小学校での陸上運動の内容及びその取り扱いを整理して、数年後に改訂が予定されている次期学習指導要領での陸上運動の内容検討に手がかりを得ようとするものである。

具体的な研究目的は、以下のように示すことができる。

- ①戦後の学習指導要領変遷における小学校陸上運動の内容及びその取り扱いについて整理する。
- ②上記①の結果を基に、陸上運動の内容とその取り扱いの成果と課題を分析する。
- ③次期学習指導要領改訂に向けての小学校陸上運動の内容及びその取り扱いについての提言を示す。

II. 研究の方法

以下の内容について、文献によって研究を進めた。

- ①戦後の学習指導要領改訂ごとの学習指導要領および体育・保健体育科の特徴を整理する。
- ②上記①に示された内容の中での小学校陸上運動の内容及びその取り扱いについての特徴をまとめる。
- ③次期学習指導要領改訂に向けての様々な教育政策の動向についての情報を収集し分析する。
- ④上記①～③を踏まえて、次期学習指導要領改訂での陸上運動の内容及びその取り扱いでの課題を検討する。

Ⅲ. 研究結果の概要

1. 戦後の学習指導要領の変遷に見る「小学校での陸上運動の特徴的な目標」

表1は、戦後（昭和30年代以降）の学習指導要領の変遷と体育・保健体育科の特徴や授業時数などと陸上運動の特徴的な目標を示したものである。

戦後各年代の学習指導要領の特徴は、志水の著書¹⁾から引用している。志水の著書では、昭和

30年代以降の変遷を「教育の系統化」、「教育の科学化」、「教育の人間化」、「教育の個性化」、「教育の総合化」と端的に示した図が記載されており、その指摘は的を得た優れたものである。なお、平成20年代の学習指導要領の特徴を「教育（内容）の明確化」としたのは筆者の私見である。

こうした学習指導要領および体育・保健体育科の変遷を踏まえて陸上運動（小学校）の特徴的な目標を見ると、やはり学習指導要領の特徴の反映

表1 戦後（昭和30年代以降）の学習指導要領の変遷と体育・保健体育科の主な内容および陸上運動の特徴的な目標

年代	1958年 (昭和30年代)	1968年 (昭和40年代)	1977年 (昭和50年代)	1989年 (昭和60年代・平成元年代)
学習指導要領の特徴	教育の系統化	教育の科学化	教育の人間化	教育の個性化
体育科の特徴	運動自体の構造を重視	運動の本質的な特性を重視	生涯スポーツへの志向を重視 (楽しい体育)	個に応じた指導の重視
体育・保健体育科の目標(要約)	<ul style="list-style-type: none"> 心身の健全な発達を促し、活動力を高める。 運動に親しませ、運動の仕方や技能を高める。 社会生活に必要な態度を養う。 健康な生活を営む態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 心身の健全な発達を促し、活動力を高める。 運動に親しませ、運動の仕方や技能を高める。 社会生活に必要な態度を養う。 健康な生活を営む態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動に親しませる。 健康・安全について理解させる。 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 運動に親しませる。 健康・安全について理解させる。 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成
時間数 体育	小	105時間	105時間	105時間
	中	105時間	125時間	105時間 (中3・105～140)
	高	7ないし9単位	7～9単位	7～9単位
学習指導要領の特徴	①学習指導要領の告示化	①学習指導要領、総則に「体育に関する指導」が明示	①基本の運動の新設(小)	①選択制の導入(中・高) ②格技から武道へ
陸上運動の特徴的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 走・跳の能力を高める。 協力や勝敗に対する正しい態度を養う。 健康・安全に留意して運動を行う態度や習慣を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種目の基礎的技術を養い、走・跳の能力を高める。 目標を決め、健康・安全に留意して運動を行い、勝敗に対して正しい態度を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種目の技術を養い、記録を高める。 協力して練習や競争ができるようにし、勝敗に対して正しい態度を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種の技術を身に付け、競争したり記録を高めたりする。 協力して練習や競争ができるようにし、勝敗に対して正しい態度を取る。

を読み取ることができる。

例えば、昭和30年代、40年代は「教育の系統化」、
「教育の科学化」が特徴とされ、陸上運動の目標
は「走・跳の能力を高める」である。また、昭和
50年代の「教育の人間化」では、体育・保健体
育科においては生涯スポーツを志向した体育授業
が注目され、運動の特性に触れる学習への関心
が高まった。そこで、陸上運動の目標にも「技能
を養い、記録を高める」とする「(記録)達成型」

が示された。さらには、平成10年代の「教育の
総合化」では、「総合的な学習の時間」が設定さ
れたことや「新しい学力観に立つ授業」が主なテ
ーマとなった。そこで、体育・保健体育科におい
ても「運動の学び方」が内容として検討され、陸
上運動の目標にも「課題解決的な学習」が加えら
れた。こうした「運動の学び方」は、平成20年
代の学習指導要領では、「思考・判断」の内容と
して引き継がれたこととなる。

2. 「平成10年代」と「平成20年代」との比較

上記のように「平成10年代」と「平成20年代」
の陸上運動の特徴的な目標には共通点が見られ
る。

しかしながら、両者には違いも見ることができ
る。

表2は「平成10年代」と「平成20年代」での「学
習指導要領での陸上運動の目標および内容（高学
年）」を比較して示したものである。

両者の違いは表2での目標の記述に表れている。

すなわち、「平成10年代の陸上運動」では、各
種目の技能を身に付けることによって競争や記録
の向上という陸上運動の特性に触れることを目指
していることを読み取ることができる。一方、「平
成20年代の陸上運動」では、競争や記録への挑

表2 小学校「学習指導要領・陸上運動の内容（高学年）
の比較

1998年 (平成10年代)	2008年 (平成20年代)
教育の総合化	(教育(内容)の明確化)
心と体を一体とした指導の重視	教える内容を明確にすることの重視
○心と体を一体としてとらえ ↓ ・運動に親しむ資質や能力 ・健康の保持増進 ・体力の向上 ↓ ・明るく楽しい(豊かな) (活力ある)生活を営む態度の育成	○心と体を一体としてとらえ ↓ ・運動に親しむ資質や能力 ・健康の保持増進 ・体力の向上 ↓ ・明るく楽しい(豊かな) (活力ある)生活を営む態度の育成
90時間	105時間
90時間	105時間
7～8単位	7～8単位
①「体ほぐしの運動」の導入(小・中・高) ②運動の取り上げ方の弾力化(小) ③武道・ダンスの履修の性別の自由化(中・高)	①「基本の運動」の廃止 ②「○○型ゲーム」の提示 ③武道・ダンスの必修化 ④「体づくり運動」の小学校低学年からの導入
○各種の技能を身に付け、競争したり記録を高めたりする。 ○協力して安全に練習や競争ができるようにし、勝敗に対して正しい態度を取る。 ○自己の能力に適した課題を決め、課題の解決の仕方を工夫する。	○各種目の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付ける。 ○進んで運動に取り組み、約束を守ったり、安全に気を配ったりする。 ○自己の能力に適した課題の解決の仕方、競争や記録への挑戦の仕方を工夫する。

	前回学習指導要領 (平成10年代)	現行学習指導要領 (平成20年代)
陸上運動	自己の能力に適した課題をもって次の運動を行い、その技能を身に付け、競争したり、記録を高めたりすることができるようにする。 ア 短距離走・リレー及びハードル走 イ 走り幅跳び及び走り高跳び	次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。 ア 短距離走・リレーでは、一定の距離を全力で走ること。(一部省略) エ 走り高跳びでは、リズムカルな助走から踏み切って跳ぶこと。

戦は、いわば手段的に扱われ、最終的には各種目の「技能を身に付けること」を目指すとする記述である。この両者の目標の違いは、「教育の総合化」と「教育（内容）の明確化」を特徴とした学習指導要領全体の基本的な考え方から繋がっていることを指摘できる。

Ⅳ. 次期学習指導要領改訂における「陸上運動の目標および内容」の考え方

おおよそ10年ごとに改訂がなされる学習指導要領は、平成27年度中には改訂の基本的な考え方が提示される可能性がある。次期学習指導要領の改訂への本格的な準備がスタートする時期とも言えよう。

「小学校での陸上運動の目標と内容」を提示する観点からは、次のことを指摘することができる。

1. 陸上運動の特性に触れることを授業づくりのメインテーマとすること。

「教育（内容）の明確化」を特徴とする平成20年代の学習指導要領では、授業づくりの主眼は「各種目の技能を身に付けること」と言えよう。「陸上運動の特徴的な目標」にも、そのことが示されている。

それに対して、次期学習指導要領では、小学生からみた「陸上運動の楽しさ・魅力（特性）に触れること」を最大限に重視する授業づくりに一層関心を向ける必要があると思われる。個人間やチーム間での工夫された競争や個人々の達成可能な記録への挑戦こそが「陸上運動の授業が楽しい、おもしろい」という児童の反応に結びつくと思うからである。「各種目の技能を身に付けること」は、陸上運動の特性に触れるための手がかりの1つとして位置づけるようにしたい。

2. 課題解決的な学習を通して「体育での学力」を育てるようにすること。

陸上運動の授業での課題解決的な取り組みは、

「平成10年代の学習指導要領」から継続されている。この「体育での学ぶ力の育成」は、次期学習指導要領でもより積極的に継続される必要がある。「体育での課題解決的な授業」は、「めあて学習²⁾」として提案された時期もある。この「めあて学習」に示された「めあての中身」と「学習の進め方」は今後の授業づくりにおいても重要な手がかりとなる。

3. 個に応じた目標記録の設定を授業づくりでさらに活用していく。

筆者らは、陸上運動の授業づくりにおける個に応じた目標記録の設定の重要性を提示してきており、例えば「走り高跳びのノムグラム」などを示してきた。加えて、筆者らは「走り幅跳びにおける個に応じた目標記録の設定」に向けても検討を始めている。また、「投げることの目標記録の設定」も今後予定している。

「個に応じた目標記録の設定」は、陸上運動の授業づくりの成否に決定的に影響を与える要因と考えている。

V. ま と め

小学校体育の一運動領域である「陸上運動の目標や内容」も教育全体の基本的な考え方を示した学習指導要領と密接に関連している。

陸上運動の授業づくりをより一層活性化させるための要因を今後とも検討していくことが重要である。

本研究は、平成26年度国士舘大学体育学部附属体育研究所研究助成により実施された。

引用・参考文献

- 1) 志水宏吉、学力を育てる、岩波新書、2005年
- 2) 杉山・細江、池田編著、小学校体育「めあて学習」の進め方、東洋館出版社、1997年